

只見町における野生植物資源利用に関する地域知の 若年層による保有状況調査

小柳知代（東京学芸大学）、松浦俊也、古川拓哉、小山明日香（森林総合研究所）

I. はじめに

農山村における地域独自の生物文化多様性は、地域の伝統的な生活、文化、自然と深く結びついた生態学的知識（地域知）を基盤として成立している。地域知の消失は、生物文化多様性の消失に直結するが、地域知を活用して生活してきた世代が高齢になるにつれて、その消失速度が一層加速しつつあることが指摘されている（小柳・米澤 2015）。福島県南会津郡只見町では、地域の自然と文化を活用した地域づくりを理念として掲げ、地域の自然生態系に関する幅広い学術調査研究が蓄積されている。地域知の消失をくい止め、只見町独自の生物文化多様性を保全していくためには、実際に野生生物資源を活用してきた人々の地域知に焦点を当てることで、消失の背景や継承に向けた具体的な対策を検討していくことが急務である。特に若年層への継承を考える上では教育現場との連携や学習プログラムの開発が重要である。

本研究では、昨年度只見町で実施した年長者からの聞き取り調査に基づく野生生物資源利用に関する知見（小柳ら 2020）を踏まえ、地域知の消失実態を明らかにすることを目的とする。特に若年層に焦点を当て、野生植物の食に関わる地域知の保有状況や、摂食経験等に関するアンケート調査を実施することで、地域知の継承に向けた課題を検証する。

II. 調査地と調査方法

調査地は、福島県南会津郡只見町とし、町内の小学校3校の児童（5・6年生）とその家族、および教職員の方々を対象としたアンケート調査を実施した。昨年度の年長者からの聞き取り調査の結果を踏まえ、只見町で食されてきた主

要な山菜37種、木の実26種を抽出した。その上で、山菜と木の実合計61種（重複種2種を含む）について、それぞれの写真と利用法をまとめた山菜・木の実ミニ図鑑を作成した（図1）。ミニ図鑑とアンケート票を回答者に1部ずつ配布し、各植物に関する知識（①知っているか、②食べられることを知っているか）と経験（③食べたことがあるか、④自分で採ったことがあるか）を回答してもらった。併せて、回答者の学年・年齢、家族構成、只見町の在住歴、野外遊びの頻度、山菜・木の実の採集頻度、摂食頻度、知識欲なども質問した。ミニ図鑑とアンケート票は、各小学校を介して配布していただき、児童とその家族（父母や祖父母等からいずれか1名）、教職員の方々に回答してもらった。配布数は、児童59部、家族58部、教職員45部で、それぞれ56部（回収率：95%）、57部（98%）、41部（91%）回収した。未回答等の大きな不備が認められた2部を除く152部を解析対象とした。

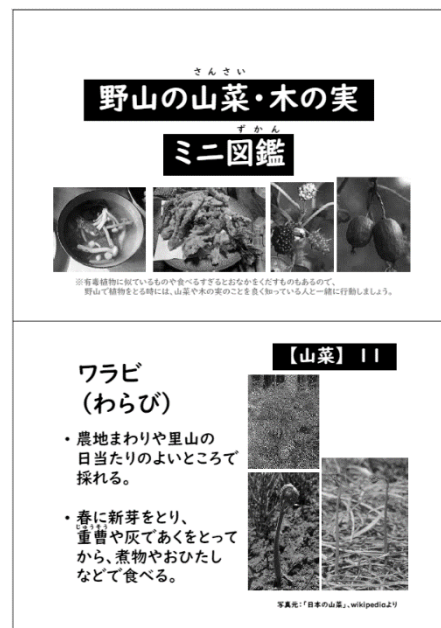


図1 山菜・木の実ミニ図鑑（見本）

III. 結果と考察

1. 資源植物に関する児童の知識や経験

資源植物（全61種）に関する知識（①や②）や経験（③や④）の保有数は、年齢や居住歴と有意な正の関係性を示した。児童の知識（①や②）の保有数は、家族と比較して有意に低かったものの教職員と有意差は無かった（図2左）。一方で、児童の経験（③や④）の保有数は家族だけでなく教職員よりも有意に低かった（図2右）。

2. 知識や経験の保有状況と関連する要因

児童の知識（①や②）保有数は、祖父母との同居・近居の有無や採集経験の有無によって有意な差を示さなかったが、摂食頻度と有意な正の関係性を示した。家族や教職員については、過去（子どもの頃）や現在の採集頻度が高いほど知識保有数も多い傾向が確認できた。また、祖父母と同居・近居している人ほど、家庭での摂食頻度が高かった。一方で、児童と家族の摂食頻度を比較した結果、児童の方が有意に低かったことから、一部の児童は地域で採れる山菜であることを認識せずに食べている可能性があると考えられた。

3. 地域知の継承に向けて

今回のアンケート調査から、山菜や木の実についてもっと知りたいと思っている児童が60%以上いることが分かった（図3）。児童の家族や教職員の知識欲も同様に高かった。一方、授業に取り入れたいと思うかについては、教職員でそう思うと回答した割合（約50%）が知識欲の割合（約70%）よりも低かった。野外での活動に伴う安全管理や、収穫可能な時期に変動があり年間計画が立てにくいこと、また只見町出身の教員が少なく教員のみで授業を担うことが困難なこと等が要因として考えられる。

地域知は、日常的な自然との関わりの中で形成され継承されてきたものであり、自然の恵みを後世まで享受していく上で不可欠である。家庭での摂食頻度を高めていく工夫や、学校にお

ける地域資源を扱った学習プログラム開発のための研究を継続していく必要がある。

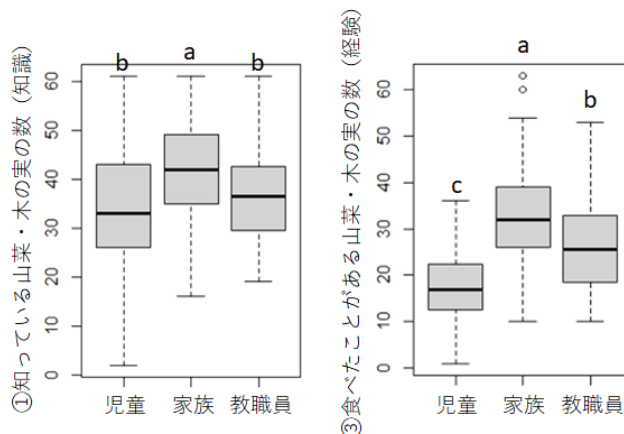


図2 知識や経験の保有数の違い

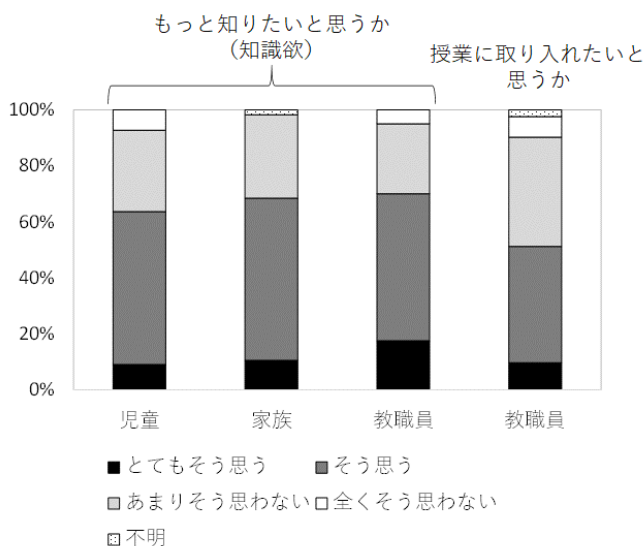


図3 山菜や木の実に関する知識欲

謝辞：

本研究は、令和2年度「自然首都・只見」学術調査研究助成による支援のもとで実施されました。アンケート調査の実施にあたっては、只見町教育委員会の渡部賢史氏、只見小学校、朝日小学校、明和小学校の校長先生および教頭先生に多大なご協力をいただき、誠にありがとうございました。アンケートにご回答いただいた児童の皆さま、ご家族の皆さま、そして教職員の皆さまに心から御礼申し上げます。

引用文献：

- 小柳知代・米澤健一（2015）伝統知に基づく多様な植物資源利用とその変遷—新潟県十日町市に位置する中山間集落を事例に—。環境教育学研究 24, 3-14
- 小柳知代・松浦俊也・古川拓哉・小山明日香（2020）只見町に伝わる生物資源利用に関する伝統的生態学的知識の保全と活用。2019年度「自然首都・只見」学術調査助成金事業要旨集